

曾槃『薬圃撷餘』考

景 徳

A Study on Yakuho Ketsuyo by Sō Han

JING, De

Abstract

Sō Han (1758-1834), who was physician to Shimazu Shigehide, the 8th feudal lord of the Satsuma Domain, wrote *Yakuho Ketsuyo* from the latter half of the 18th century to the first half of the 19th century, recording his many years of experience and observation. This paper considers the process of its formation based on the five editions of the manuscripts currently available for study in Japan.

Through a method of bibliographic comparison, it is possible to clarify the relationship between all five versions (National Diet Library, National Archives of Japan, Iwase Bunko Library, Kyo-U Library, and Tokyo Medical University Library) and the time of their formation. The National Diet Library and Kyo-U Library editions are three-volume books consisting of three sections, and the others are four-volume books consisting of four sections. The arrangement of the sections and the number of entries indicate that the Iwase Bunko Library edition is intermediate between the three-volume and four-volume versions.

Yakuho Ketsuyo contains many citations from earlier books on materia medica and geography, the most notable of which is *Ishō*. Many parts of the book are related to Sō Han's teacher, Taki Motonori, and the author of *Ishō*, Taki Motoyasu, showing that in addition to his duties as physician to the Satsuma Domain – managing the medicinal plots and appraising the herbs there – there are traces of interaction with physicians from the shogunate and those from other domains stationed in Edo.

Not bound by traditional knowledge of medicinal herbs, Sō Han recorded his knowledge of imported books such as *Honzō Jūshin* and *Seiki Monkenroku*, and also had an interest in Western botany and pharmacy, obtaining new information from scholars of Western learning.

The work that Sō Han performed in *Yakuho Ketsuyo* adding new insights and information seems to have been common to materia medica scholars at that time. Through examples such as entries on *Panax quinquefolius* and *Ophiocordyceps sinensis*, it can be pointed out that Taki Motoyasu's *Ishō* had not been made into a printed book at the stage when Sō Han was referring to it. There are also traces of additions in *Yakuho Ketsuyo* made by scholars of materia medica who succeeded Sō Han. The results of the daily communication and exchanges of information among scholars are reflected in the changes in these manuscripts.

Keywords : materia medica, Sō Han, *Yakuho Ketsuyo*, the Taki family, *Ishō*

要旨

曾槃（1758-1834）は薩摩藩八代藩主島津重豪の侍医である。『薬圃撷餘』は曾槃が18世紀後半から19世紀前半にかけて著述したものである。『薬圃撷餘』には多年の曾槃自身の体験や見聞が記録として残されている。本稿は、調査可能な『薬圃撷餘』五つの写本に基づいて、『薬圃撷餘』の成立過程を考察したものである。

現在見られる諸写本はいずれも稿本であるが、①国会本、②内閣本、③岩瀬本、④杏雨本、⑤東医本諸本の書誌学的な比較検討を通じて、それぞれの成立に関する前後関係および写本相互の関係を明らかにした。内閣本と杏雨本は三つの部類から成る三巻本であり、ほかは四つの部類から成る四巻本である。部類の配列や項目数を見ると、岩瀬本は三巻本と四巻本の中間的な存在であることがわかった。

『薬圃撝餘』は先行の本草書や地誌などの多くの引用から成り立っているが、その様々な引用書の中で、注目したいのは『医賸』の存在である。曾槃の師である多紀藍溪及び『医賸』の著者である多紀元簡と関わる記事が本書には散見され、曾槃の活動の具体的な様相、すなわち、薩摩藩の侍医として公的な任務一藩領にある薬圃の管理や薬草の鑑定—に加えて、幕府の医員や他藩の江戸詰の医者たちとの交流の跡が記されている。

曾槃は伝統的な本草知識に束縛されることなく、舶来書籍（『本草従新』『西域聞見録』など）の知識を筆録するとともに、西洋の植物学や薬学への関心を持ち、蕃書が読める蘭学者たちから新しい情報を得ていることが注目される。

曾槃が『薬圃撝餘』で行った新たな見聞や情報を増補していく作業は、当時の本草学者に普遍的なものであると考えられる。「廣東人參」「冬虫夏草」のような例を通じて、多紀元簡『医賸』も曾槃が参照した段階から刪補を経て刊本の形になったことを指摘した。『薬圃撝餘』の中には後継の本草学者たちが残した増補の跡が随所に見られる。学者たちの日々の交流や情報交換の結果が、写本の変化として表れているのである。

キーワード：本草学 曾槃 『薬圃撝餘』 多紀氏 『医賸』

はじめに

本論文は、薩摩藩八代藩主島津重豪（1745-1833）の侍医曾槃（1758-1834）が18世紀後半に著述した『薬圃撝餘』を取り上げ、現在調査可能な五つの写本に基づいて、『薬圃撝餘』の成立についてを考察するものである。『薬圃撝餘』は、曾槃が薩摩藩に仕官する寛政四年（1792）九月¹前後において本草学者としてどのような活動を行い、その学問がどのようなものであったのかを知る重要な文献であると考えられる。そこで、写本の書誌学的比較および本文の検討を行うことで、本書の本文が先行する本草書をどのように受容しているのか、その実態を把握するとともに、曾槃の交友関係や学問的背景が本書の成立にどのような影響を与えているのか、そして曾槃の著作がその後の薩摩藩版の本草書にどのように寄与していったのかを解明する糸口としたい。本稿では、こうした一連の問題を曾槃が生きた時代の本草書・本草学者・本草学研究的の諸状況に即して究明することを目的とする。

一、『薬圃撝餘』の諸本と書誌的調査

本草とは薬となる動植物や鉱物類を広く指すことばである。本草学は薬物の発見、応用が一定の段階になって現れた学問である。その知識を体系的に集成した書物—本草書—には薬物についての情報が蓄積されている。古代から現代に至るまで日中両国の学者は本草学の歴史

1 上野益三著『年表 日本博物学史』八坂書房 一九八九年 P.218 ※「九月、曾槃（占春）、薩摩藩主島津重豪の記室（秘書官）となる。禄一五口、金三〇両。堀本蘇山の推奨により、寛政五年夏江戸より薩摩に赴き、人參栽植のことに従事する。」

によって緊密に結ばれていた。八代将軍徳川吉宗の物産政策に応じて²、当時日本国内で産出する薬物や有用品の探索と採取を目的として、幕府は各地へ採薬使を派遣し³、併せてその土地の人々に何がどのように役立つかを教えた。これが、それぞれの地域で、動植物への関心を高めることになり、また、多くの本草学者が本草学の典籍の整理及び源流の考察を行い、誤謬の弁別について著述を残すことになった。

薩摩藩に仕える本草学者曾槩は動植物の識別・鑑定などの面で非常に高い学識を持ち、薬草の採集や人参の栽培に熱心で、医学館での本草講義を経て⁴、寛政四年（1792）に薩摩藩に登用され⁵、藩主島津重豪の侍医となり、後に数多くの薬物本草や農事に関わる著述を完成した。『薬圃擷餘』もそのひとつである。この書物の特徴は曾槩が単に物産や薬品の項目の整理や効用や典拠などの記述だけでなく、その中に多彩な曾槩自身の見聞や経験を通じて得た知識が記載されている点のほか、多くの知識人との交流を持つ曾槩の個人的経験（伝記的事実）が「按語」と呼ぶ評語のなかに現れている点である。按語は「按…」「槩按…」「又按…」「槩又按…」などの形で挙げられ、曾槩自身の経験や見聞に裏打ちされた情報が記載されており、こうした情報があることによって本書は専門的な本草書であるのみならず、近世期の随筆的な特徴を合わせ持つ書物となっている。また曾槩の個人的経験に基づく知識は後にふれるように曾槩の伝記研究にも有益な情報を提供してくれる。

さて、『薬圃擷餘』は現在数種の写本が現存しているが、その成立については不明の点が多い。高津孝氏は「曾槩著述考略 本草の部」⁶で、国立国会図書館所蔵本の文中に「辛未之春」と記すので、「文化8（1811）年以降の作」とする。ただし、『薬圃擷餘』の諸本の研究はまだ行われておらず、写本は内容や本文などの量が変化することが一般的であることを考えると、諸本の調査により「成長」の過程を考察することが必要である。後述するように、実際、国会図書館本の『薬圃擷餘』には他の写本と比べて、項目数及びそれに応じる内容について、成長性⁷が看取できる。つまり、国会図書館蔵の『薬圃擷餘』の成立が文化8年以降というのは言えるが、他の写本成立年代に対して、一言で以て之を蔽うのは困難であると考え。先行研究の中に、曾槩の著述に対し、その成長性を顧慮した研究はほとんどないといえる。本稿では『薬圃擷餘』の諸本調査を行い、その結果に基づき本書の成立の過程を具体的に把握したい。この作業を通して曾槩が『薬圃擷餘』を著述した意図とその変化も把握できると考える。

2 笠谷和比古著『徳川吉宗』筑摩書房 一九九五年 PP.167-204

3 杉本つとむ著『江戸の博物学者たち』講談社学術文庫 二〇〇六年 PP.73-88

4 富士川游〔ほか〕編修『杏林叢書』第2輯 吐鳳堂書店 大正十二年 PP.270-271
国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/935250>

5 上野益三著『年表 日本博物学史』八坂書房 一九八九年 PP.270-271

6 渡辺芳郎編『奄美群島の歴史・文化・社会的多様性』南方新社 二〇二〇年 PP.62-63

7 諸写本はいずれも筆写者不明で、年を経て、本文が増補された可能性がある。門人、知人などやのちに書写する人の手によって加筆が行われるのは一般的である。上梓されたのには大槻玄沢著『蘭畹摘芳』と多紀元簡著『医賸』のような例があるが、写本の形で残されたものも多く見られる。詳細は後述する。

1. 『薬圃撝餘』の諸本

現存する『薬圃撝餘』の写本は複数存在する。日本古典籍総合目録データベース⁸によると『薬圃撝餘』の題名で立項されている書籍の所蔵先は以下のとおりである。

【写】国会白井（二冊）、内閣（二冊）、岩瀬（「曾榛堂薬圃綴（ママ）余」，四冊）（一冊）、杏雨、植■、村野、東京医科大学（二冊）

また「曾艸臈薬圃撝餘」で立項されているものがある。

【写】東洋岩崎、杏雨（「艸臈薬圃撝余抄録」，一冊）

このように、『薬圃撝餘』は現在写本のみ伝来しているが、合計9機関に所蔵されている。筆者が調査できたのはその中の7種⁹である。本稿で分析対象とするのは以下の①国立国会図書館白井文庫本、②国立公文書館内閣文庫本、③西尾市岩瀬文庫本、④武田財団杏雨書屋本、⑤東京医科大学図書館本5種である。

以下、順に、現在確認できる『薬圃撝餘』の写本について書誌事項をまとめて紹介するが、複写物やオンライン画像によって調査を行ったため、法量や表紙については記載していないことをことわっておく。

① 国立国会図書館白井文庫本（以下「国会本」と略称）

体裁：二冊

外題：（第一冊）「薬圃撝餘 水土金石類 完」，

（第二冊）「薬圃撝餘分目 木類 完」（題籤，墨書）

内題：「薬圃撝餘」

丁数：（第一冊）52丁 （第二冊）74丁

行数：10行

構成：（第一冊） 水土金石類目録＋同本文＋草類目録＋同本文

（第二冊） 木類目録＋同類本文＋禽獸蟲魚類目録＋同本文

識語：無

蔵書印：「白井光¹⁰」「帝国図書館蔵」

② 国立公文書館内閣文庫本（以下「内閣本」と略称）

体裁：二冊

外題：（第一冊）「椿（ママ）堂薬圃撝餘」，

8 国文学研究資料館 日本古典籍総合目録データベース https://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvSearch.cgi

9 本稿の一応の完成の後に、東洋岩崎本「薬圃撝餘」と杏雨書屋の「草臈薬圃撝余抄録」の調査ができたが、本稿の主旨に大きい影響を与えないと判断したため、最初のままとした。

10 白井光太郎 | 蔵書印の世界 - 国立国会図書館 <https://www.ndl.go.jp/zoshoin/collection/15.html>

(第二冊)「棗(ママ)堂棗園擷餘」

内題：「棗堂棗園擷餘」

丁数：(第一冊) 30丁 (第二冊) 50丁

行数：8行

構成：(第一冊) 草類本文+木類本文

(第二冊) 水土金石類本文

識語：無

蔵書印：「昌平坂¹¹」(墨印)「番外書冊¹²」(墨印)「浅草文庫」(朱印)

「日本政府図書」(朱印)

その他：表紙に「内閣文庫」の蔵書票があり、記号「和17490, 函号196-192」がある。

③ 西尾市岩瀬文庫本¹³ (以下「岩瀬本」¹⁴と略称)

体裁：四卷四冊

外題：第一冊「曾棗堂棗園擷餘 曾槃著 一」「曾棗堂棗園擷餘 一」、

第二冊「曾棗堂棗園擷餘 曾槃著 二」「曾棗堂棗園擷餘 二」、

第三冊「曾棗堂棗園擷餘 曾槃著 三」「曾棗堂棗園擷餘 三」、

第四冊「曾棗堂棗園擷餘 曾槃著 四」「曾棗堂棗園擷餘 四終」

内題：第一冊「曾棗堂棗園擷餘卷之一」、第二冊「曾棗堂棗園擷餘卷之二」、

第三冊「曾棗堂棗園擷餘卷之三」、第四冊「曾棗堂棗園擷餘卷之四」

丁数：(第一冊) 30丁 (第二冊) 28丁 (第三冊) 16丁 (第四冊) 32丁

行数：10行

構成：(第一冊) 草類目録+同本文

(第二冊) 木類目録+同本文

(第三冊) 水土金石類目録+同本文

(第四冊) 禽獸蟲魚類目録+同本文

識語：無

11 福井保『内閣文庫本考証』(日本書誌学大系106, 青裳堂書店) P.46 「昌平饗には主流である漢籍や日本の古典以外に、近世撰述の国書が多数収蔵されていた。これらの図書は、特別な蔵書という意味で、「番外雑書」または「番外書冊」と呼ばれ、主流な本とは区別して取扱われていた。」

12 同上 P.47 「蔵書印もまた同様に、主流の本には「昌平坂学問所」二行印が押されているが、これら番外本には「昌平坂」小型印を用い、学問所本来のものではないという意識があるという。」

13 西尾市岩瀬文庫に所蔵される『棗堂棗園擷餘』(資料番号：108-120)は論文を作成する時に、入手できなかったが、原稿を修正する期間に入手した。西尾市岩瀬文庫にある『曾棗堂棗園擷餘』(資料番号：152-183本稿でいう「岩瀬本」と比較すると、誤写が多く、後筆の朱墨補注書き入れが多数ある。全三巻の中、巻之一は草類、巻之二は木類、巻之三是水土金石類である。その部類と配列は内閣本と杏雨本と大体一致する。主な結論に影響を及ぼさないため、本論文の中に西尾市岩瀬文庫に所蔵される『棗堂棗園擷餘』(資料番号：108-120)関連する内容を省略している。

14 西尾市岩瀬文庫／古典籍書誌データベース 岩瀬文庫蔵書目録データと152-183
<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11F0/WJJS07U/2321315100/2321315100100010/mp01614500/?Word=%e8%96%ac%e5%9c%83%c6%93%b7%e9%a4%98>

蔵書印：「餐霞斎¹⁵蔵書印」「安静¹⁶儲（臧）」「楠谷謙」「岩瀬文庫」

④ 武田財団杏雨書屋本（以下「杏雨本」と略称）

体裁：一冊

外題：「榛堂薬圃撝餘」（直書）

内題：「榛堂薬圃撝餘」

丁数：61丁

行数：10行

構成：（一卷一冊） 草類本文＋木類本文＋水土金石類本文

識語：無

蔵書印：なし

その他：内題の次に「薩摩侍醫東都曾槃士攷著」の記載あり。後表紙見返しに「S.HAYAKAWA」の蔵書票あり。

⑤ 東京医科大学図書館本（以下「東医本」と略称）

体裁：二冊

外題：（上巻）左「春山舎¹⁷秘笈」（題簽）右「曾草臆薬圃撝餘 藤益時行¹⁸輯校 上」（直書），
（下巻）左「春山舎秘笈」（題簽）右「曾草臆薬圃撝餘 藤益時行輯校 下」（直書）

内題：「曾草臆薬圃撝餘」

丁数：（第一冊）45丁 （第二冊）63丁

行数：11行

構成：（上巻二冊） 水土金石類目録＋同本文＋草類目録＋同本文

（下巻二冊） 木類目録＋同類本文＋禽獸蟲魚類目録＋同本文

識語：無

蔵書印：「東京医科大学図書館蔵書印」（記号：1302）

：「東京医科大学図書館蔵書印」（記号：1303）

その他：内題の下に「米澤藤益時行輯抄」の記載がある。

15 同上 印記「安静儲臧」（朱方印と朱白文方印の2種）「餐霞斎蔵書印」（朱長方印，以上，安田静）・「楠谷謙」（朱白文方印）。

16 同上 印記「安静儲臧」（朱方印と朱白文方印の2種）「餐霞斎蔵書印」（朱長方印，以上，安田静）・「楠谷謙」（朱白文方印）。

17 題簽に「春山舎秘笈」とある。もと高木春山の筆写かと思われる。

18 東洋文庫編『岩崎文庫和漢書目録』東洋文庫 一九三四年 P.328 東洋文庫編『岩崎文庫和漢書目録』東洋文庫 一九三四年 P.328 「曾草臆薬圃撝餘 藤益（時行）輯，和田元龍 校 四巻 四冊」筆者注：東洋文庫に所蔵される『曾草臆薬圃撝餘』（資料番号：3-J-a-ろ-22）は論文を作成する時に，入手できなかったが，原稿を修正する期間に現物調査を行った。東京医科大学図書館にある『曾草臆薬圃撝餘』（資料番号：1302 & 1303 本稿でいう「東医本」と比較すると，その部類や配列などはかなり近い。全四巻の構成は，巻一が水土金石類，巻二が草類，巻三が木類，巻四が禽獸蟲魚類である。本論文の主な結論に影響を及ぼさないため，本稿では東洋文庫に所蔵の『曾草臆薬圃撝餘』に関連する内容や書誌事項を省略する。

まず書名について述べておく。「薬圃」とは薬園のことをいい、「撷」は「つみとる」の意である。「薬圃撷餘」とは「薬園から摘み取った余り（の薬草）」ということで、見逃されるなどした本草に関する情報を補う意を含ませたものと推定する。『薬圃撷餘』には写本によっていくつかの書名（題）があり、例えば、「榛堂薬圃撷餘」「曾榛堂薬圃撷餘」「曾草牕薬圃撷餘」などと「薬圃撷餘」の頭に「榛堂」「曾榛堂」「曾草牕」を冠したのが見られる。¹⁹これらは、人名辞典類には載せられていないが曾繁の号である可能性が高いと思われる。

また、巻冊についてもばらつきが見られ、部類の構成や数の面でも、内閣本と杏雨本は3つの部類が「草類→木類→水土金石類」の順番に従って、岩瀬本は4つの部類が「草類→木類→水土金石類→禽獸蟲魚類」の順番であり、国会本と東医本は同じく4つの部類だが「水土金石類→草類→木類→禽獸蟲魚類」の順番で、岩瀬本とは異なっている。この部類の配列や数には単なる順番の違いではなく、各写本の中の相互関係、あるいは現存する諸写本の成立過程を示す重要な意味を含んでいると考える。その点については節を改めて検討することにする。

二、諸本系統について

1. 巻冊の相違

諸本の関係を考察する前に、『薬圃撷餘』が曾繁の蔵書目録の中でどのように記載されていたかを見ておこう。門人小沼玄龍が編んだ杏雨書屋蔵『曾占春先生自著目録』²⁰（杏雨-1453）には「薬圃撷餘 三巻 / 卷第三琉球物産志」（一丁表から一丁裏）とある。後半の「卷第三琉球物産志」の部分は他の記載例から判断しても内容の補足説明と考えられる。同じく杏雨書屋蔵の『曾氏蔵書目』²¹（成形図説底稿²²）に「撷餘 二巻」（一丁裏）とある。

一方、国会図書館所蔵『春の七くさ』²³の巻末の刊記にある出版予告には「薬圃撷餘 四巻 近刻」とある（図一）。

このように、『曾占春先生自著目録』と『曾氏蔵書目』及び『春の七くさ』の三者の中に、『薬圃撷餘』の冊数及び構成の情報が提示され、それらは少しずつ異なっていることがわかる。『曾占春先生自著目録』と『曾氏蔵書目』の成立年代は不明であるが、『曾氏蔵書目』には『春の七くさ』の記載がないので、その内容は『春の七くさ』成立より前のものと考えられる。『春の七くさ』は寛政十二年（1800）九月に出版されたが、『曾占春先生自著目録』の中に「春菜考一卷 / 書肆目録春七草既刻」という記載があるので、『曾占春先生自著目録』は寛政十二年九月以降に成立の可能性が高いと判断する。

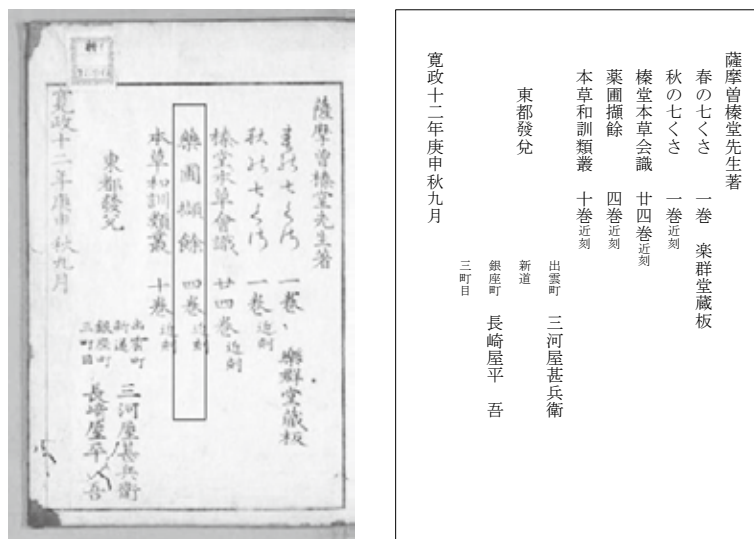
19『国書人名辞典』（岩波書店、1996年）には号として「占春・永山・永年・庸山・昌適」を載せるのみ。

20『曾占春先生自著目録』は三丁表に「春菜考一卷 書肆目録春七草既刻」とあること、成立は『春の七くさ』が出版された寛政十二年以降。門人小沼玄龍の自筆かどうかは判断しにくい。書者が不明である。

21『曾氏蔵書目』（『成形図説底稿』）という十八丁からなる写本。三百三十八の書名を列記し、その半ば近くが広義の本草書である。編者は不明。この書目の中には自著も含み、門人小沼玄龍編『曾占春先生自著目録』（杏雨書屋蔵）にあげられるものと大体一致する。

22 上野益三著『薩摩博物学史』島津出版会 一九八一年 PP.210-215

23『春の七くさ』国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2536344>



図一：国立国会図書館蔵『春の七くさ』の刊記と出版予告

以上をまとめると、『薬圃撝餘』は

- ① 二巻及び補遺一卷の合計三巻・・・・・・・・・・・・・・・・・・（『曾氏蔵書目』）
- ② 三巻であり、そのうち巻の第三は『琉球物産志』・・・・・・・・（『曾占春先生自著目録』）
- ③ 四巻・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（『春の七くさ』出版予告）

上記の目録や出版予告にある「巻」という単位は、現在のように、内容的なまとまりを示す書誌学的な概念として使われているのではなく、「冊」の意味で使われていると考えてよい。そう考えると、①②は三冊本、③は四冊本ということになるが、実際に現在の写本と比べると冊数の面では、杏雨本が一冊、国会本、内閣本、東医本が二冊、岩瀬本が四冊とさまざまである。①と②は二冊が基本でその後補遺が加えられた形になっていることから、国会本を初めとする二冊の形態がこれに対応する、また③は岩瀬本に対応するとも見えるが確たることは言えそうにない。そのため、ここでは、諸本の内容的なまとまりに着目して相互の関係を把握していきたい。上記の写本の「構成」の欄に記したように、部類を手掛かりとして、すなわち「部」を「巻」と考えて系統を分けるのである。これにより、「三巻本」と「四巻本」の二系統があることが見えてくる。内閣本と杏雨本は三巻本に属し、岩瀬本、東医本及び国会本は四巻本に属す。互いに細かい差異が存在しており、これについて次に詳しくみていこう。

2. 部類

三巻本と四巻本に分けてさらなる検討を行う前に、従来の本草書の部類について簡潔に説明しておきたい。岡西為人著『本草概説』²⁴によりながら、本草書の部類の変遷について述べて

24 岡西為人『本草概説』オンデマンド版 創元社 二〇一八年 PP.555-558

いこう。例えば、薬の効用や性味を重視する『神農本草経』はその薬品分類ははじめて自然分類を採用して「玉石、草木、虫獸、果、菜、米食」の六部に分け、同一内部では薬性の上中下の三品分類方式を残すことが特徴である。この方式は『本草綱目』の出現するまで主流であった。明の李自珍の『本草綱目』（1598年ごろ刊）は「水・火・土・金・石・草・穀・菜・果・木・服器・蟲・鱗・介・禽・獸・人」の部類を分ち、前代本草書への注疏を加える形式のような伝統的方法²⁵から新しく創り出したものである。そして、明代の『本草集要』や『本草從新』などが相次ぎ上梓され、『本草集要』のように三品分類を廃して、「草・木・菜・果・穀・石・獸・禽・虫魚・人」の十部に分けて、品物を列挙し、本草の要点をまとめ初学者や儒者で本草の術に通じようとする者の便とした。これらの書は本草書の部類の面で特徴がある。本来の「三品分類」から「水・火・土・金・石・草・穀・菜・果・木・服器・蟲・鱗・介・禽・獸・人」を経て、「草・木・菜・果・穀・石・獸・禽・虫魚・人」と順番を変化させている。

本草学の部類に関しては、金類・石類よりも草類・木類が先頭に立つ形式が新しい形式となっていることを押さえた上で、『薬圃撷餘』の部類について検討していこう。

表一は部類の数によって三巻本と四巻本の区別をしたうえで、諸本がどのような部類の構成（順序）になっているかを一覧にしたものである。

これを見ると、内閣本と杏雨本が3つの部類からなり、「草類→木類→水土金石類」の順である。その他の三本は同じく4つの部類を持ちながら、岩瀬本は内閣本・杏雨本の形の後ろに「禽獸蟲魚類」が追加された形をとるのに対して、国会本と東医本は「水土金石類→草類→木類→禽獸蟲魚類」のように「水土金石類」を先頭にする形をとっている。岩瀬本は部類の数の点では、国会本・東医本に近いものの、部類の配列に関しては内閣本・杏雨本に近い形を持っているといえよう。先述した本草書の配列の歴史を考慮すると、「草類」で始まるものが『本草從新』（清の呉儀洛撰、1757年刊、18世紀後半に日本に渡来）など比較的新しい形式であり、「水土金石類」が先行するのは『本草綱目』に近い伝統的なものである。内閣本・杏雨本・岩瀬本は新しい形式を、国会本・東医本は伝統的な形式を採用したと見てよいのだろうか。

表一：『薬圃撷餘』諸本の部類と配列

諸本	巻数	配列
内閣本	三巻	草類→木類→水土金石類
杏雨本		草類→木類→水土金石類
岩瀬本	四巻	草類→木類→水土金石類→禽獸蟲魚類
東医本		水土金石類→草類→木類→禽獸蟲魚類
国会本		水土金石類→草類→木類→禽獸蟲魚類

『薬圃撷餘』の「脾巴肉」の下に次のような記述がある（下線は引用者）。

25 高津孝「曾繁著述考略 本草の部」渡辺芳郎編『奄美群島の歴史・文化・社会的多様性』南方新社 第3章 二〇二〇年 PP.62-63

邦俗所謂八掌…（中略）…吾侯往歲命中山王質之唐山，福州高林枝云是脾巴肉，晋安陳光漢云俗名江子，…（中略）…金剛纂出初卷中部。

下線部「金剛纂出初卷中」に着目すると、「金剛纂」については「初卷中」に出ていることを言っている。「中」は、すなわち「草類」を指す。『薬圃擷餘』ではもともと草類は「初卷」に置かれていた可能性が高いと推定されるのである。

成立順序として、「草類」「木類」「水土金石類」が出来上がった後、「禽獸蟲魚類」が付け加えられ、さらにその後で一部の写本に見られるように「水土金石類」が前に出されたという流れを想定することができるのではなからうか。当初の配列順は本書の中にも引用される『本草従新』の配列に従って構想されたが、「水土金石類」を先頭にすべきであると考えた者（本草学の伝統に従うべきだと考える者と言い換えてもよい）によって構成が変えられた可能性が高いのである。この間の経緯については推測の域を出ないものの、『薬圃擷餘』の本質や曾槃の編集方針にもかかわる重要な問題である。

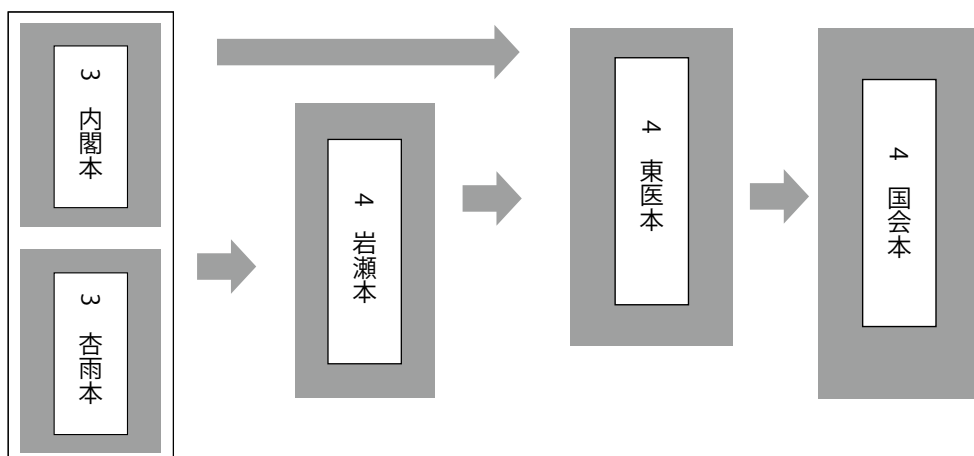
3. 項目数

部類によって系統分けを試みたが、各項目の構成や項目数についても考察は必要であろう。表二は「水土金石類」「草類」「木類」「禽獸蟲魚類」の部類ごとに、諸本の項目数を一覧にしたものである。

表二：『薬圃擷餘』諸本の部類と項目数

分類	内閣本	杏雨本	岩瀬本	東医本	国会本
水土金石類	30	30	30	33	33
草類	49	49	50	53	53
木類	46	46	46	54	54
禽獸蟲魚類			53	54	57

表二から、内閣本と杏雨本は部類だけでなく項目数も完全に一致していることがわかる。一方、国会本と東医本も「禽獸蟲魚類」が3項目だけ国会本が多いという点を除き、ほぼ一致する。部類の配列で三巻本と同じ形をとっていた岩瀬本は、項目数においても内閣本・杏雨本との共通する面が見て取れ、「水土金石類」「木類」で数が一致、「草類」ではわずかに1項目だけ多くなっているが、よく似た数値を示している。岩瀬本の過渡的中間的な性格が浮かび上がった。



図二：『薬圃撷餘』諸本の関係略図²⁶

以上の検討を踏まえ、諸本の間を二で示すと図二のようになるであろう。項目数は増加していくのが普通であるから三巻本から四巻本への流れは動かないと思われる。『春の七くさ』の近刊広告で四巻（四冊）での刊行が予定されていたことから、上記の四つの部類を一冊ずつ配する計画であったと考えるのが自然ではないだろうか。

なお、部類の変化の要因については、曾繁の判断かそれとも弟子などの判断によるものかという問題や、同時並行的に編纂が行われていた『榛堂本草会識』（『本草綱目纂疏』の初名か）との関係などを考えていく必要があるが、これについては後考を期したい。

三、本文

前節では、『薬圃撷餘』の形式的側面（部類・項目数の異同）から、現在確認できる写本について検討した。本節では、本文の具体例を挙げながら、記述の特徴について検討していく。また、併せて本文から前節の系統についても見ていく。

本節で具体的に取り上げるのは、草類の「西洋人参」「冬虫夏草」と木類の「杜松」である。本文に引用する際は最も項目数の多い国会本によるものとし、便宜上段落を区切り（A～H）、句読点や記号（書名は□で示す）、下線を施し、割注は【】で括って示した。

1. 西洋人参

まず、「西洋人参」の本文を以下に掲げる。

西洋人参 即廣東人参

A. 椽堂 医賸 云、廣東人参、近來舶上多致之、未詳是何物。

B. 惠州府志 云、韓宗伯云、坡公 羅浮五詠、人参・地黄・甘菊・薏苡・枸杞、蒔千山房

26 諸本前の数字は巻数のことを指す。

之小圃各為詩紀之。今羅浮所產惟枸杞薏苡恒有。甘菊亦時有之。人參地黃即老圃無能識者。當時崎嶇万里，從何移根。人參之詩曰，靈苗此孕育，肩股或具體。又曰，青極綴紫萼，圓實墜紅米。言之鑿鑿，應非浪語，然二物不書傳信也。

C. 屈大均【新語】亦云，廣東無人參，是以近為本草之學者皆以為此非人參，即所謂三七，年然攷諸書，三七產廣西，而未言產廣東，且云暴乾黃黑色，如老地黃，有節，今廣東人參如此乎，【按【錦囊秘録】，解毒至寶丹中用人參三七，槃按清陳振先【採葉録】云，廣三七又名旱三七，治諸般血症，注云，三七有數種，羊腸三七，竹節三七，謂之水三七，人參三七，蘿蔔三七，又云旱三七】。

D. 特清宋廣業【羅浮山志會編】品物志云，人參羅浮所產，殊与本草人參不類，狀如仙茅，葉細圓有紫花，三葉一花者為仙茅，一葉一花者為人參，根如人字，色如珂玉，煮汁食之，味与人參無別，但微有膠漿耳，滋補亦如人參，山人採作藥餌，羅浮山在廣東惠州，乃此三極五葉之外，廣東別是有一種人參，不知吳舶所載來亦此種与，紀以俟檢查。

E. 槃牲歲在薩摩，薩及琉人呼廣東參做洋參，因問之琉球吳繼志者，曰唐山人亦謂之洋參，云是洋人繫舶於廣東嶼口而鬻之，乃廣人致之福州，故以洋為帶号也，福俗或喚為廣東參耳，必非廣東產之矣。

F. 槃因按清吳儀洛【本草從新】云，西洋參苦寒微甘，味厚氣薄，補肺降火，生津液，除煩倦，虛而有火者相宜，出佛蘭西，【形似遼東糙人參，煎之不香，其氣甚薄】。

G. 世或以七星子，【清人所名俗名零余人參，漫為廣東人參】。

H. 槃原其所淵原，番書亞武千仁大天須圖七星子，而標人參二字，昧者盖證之，与近来一医断著之書，可謂疎妄。

これを見てすぐ気づくのは多くの引用書で構成されているということである。書名としては順に『医賸』『惠州府志』『(広東)新語』『羅浮山志會編・品物志』『本草從新』などである。この中で注目されるのは冒頭にある『医賸』である。



図三：『医賸』 国立国会図書館蔵本

『医賸』は多紀元簡（1755-1810）が編纂した本草書である。治療や公務の隙に神農医学本草に於いて、古来より存在する医書の疑義について弁じたもので考証学の特徴が著しい。元簡は曾繁の師である永寿院多紀元恵（藍溪）の長男であり、字は廉夫、幼名金松、長じて安清と称し、のち安長と改め、桂山また樸窓と号した。医学を父に、儒学を井上金峩に学び、時の老中松平定信にその精博を賞され、奥医師に抜擢され、のち法眼に叙された。寛政十一年（1799）に父の跡を継いで家督を相続したが、享和元年（1801）、医官の選抜に関して不満を直言したため、奥医師を免じられ寄合医師に左遷された。²⁷『医賸』の序文²⁸と付録（跋文）²⁹によると、この間、元簡は旧著の刪定、『医賸』の編述などを行ったという。曾繁は田村西湖の父藍水に本草の学問を学んだが、幕府の物産会や多紀家の主宰する医学館の薬品会への参加など、曾繁の生涯において多紀氏（藍溪・元簡父子）と交流した事例が目立っている。後述するように、曾繁は多紀藍溪のために「底野迦（テリアカ）」の材料である「杜松」を房総の海辺に探しに行っていることや、草類「癩蝦蟇草」の項に「知是癩蝦蟇草，則天明精矣，劉君廉夫為余説」と多紀元簡の説を挙げていることなどがその例である。更に、多紀元簡の『医賸』が引用されていることは注目すべきである。

『医賸』は文化六年（1809）に上梓されたが、『薬圃撰餘』の成立段階では、『医賸』はまだ

27 森潤三著『多紀氏の事蹟』日本医史学会 国立国会図書館デジタルコレクション「多紀氏本家履歴」<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1208864> PP.27-28 多紀桂山の項

「多紀元簡，字廉夫，通稱安長，【號桂山，又樸窓】元徳子，受父學，記性絶倫，一覽終身不忘，寛政初，執政白河侯召試之，設醫事疑難，元簡剖析三十餘條，侯大稱獎，俄擢侍醫，叙法眼，尋醫學教諭，元徳致仕，特命執七，享和初，詮選醫官，以議論旨罷侍醫，於是退而覃力撰述，以聿脩先緒，故迪後進為任，取素靈以下，次第整釐，為之箋釋，以授學館諸生，門徒爭進，自當世耆宿，皆執弟子體，既能侍醫，術更大行，水戸侯疾，若已平者，元簡診之，出告共臣曰，不可為也，大期迫矣，不出三日，諸臣驚且疑，既而果然，性高雅，澹于勢利，酷好讀書，凡古今文字，言涉醫事者，悉推其根柢，而究之，時試諸疾，往往得收奇功，人不知其有所原，以為新意所出，及言某資何方，某見何方，則及無不喟然嘆息，為不可及矣，所著，諸注條疏衆說，斟酌精義，共錯辭隱義，參伍校點，可通通之，疑則關之，深得箋釋之旨，先是諸家厭五行經絡之說，各有所論者，指歸不一，互相詆毀，大抵癩造之說勝，而訂詁之義微，元簡之書出，海內講醫籍者，識所率由，而前世羸梗武斷之風始除矣。

桂山著有素問識，靈樞識，傷寒論輯義，金匱玉函要略輯義，脈學解要，觀聚方要補，櫃中鏡，救急避方，扁倉傳彙考，醫賸，樸窓類鈔，及文集等。」

28 樸蔭拙者 著『医賸』英屋文藏 [ほか9名] 文化6 [1809] 識 国立国会図書館デジタルコレクション <https://www.dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2555673?tocOpened=1>

「余辛酉冬被黜于外班，公事頗閑，然日省病，家不遑寧處，唯每燈火可親之候，取壯時所筆記為之編割，顔曰医賸，以仰正于來哲，樸蔭拙者」

29 樸蔭拙者 著『医賸』英屋文藏 [ほか9名] 文化6 [1809] 識 国立国会図書館デジタルコレクション <https://www.dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2555675?tocOpened=1>

「医賸三卷附録一卷，伯氏廉夫天明戊申所筆記而未及脱藁，授之筐笥不復意者，殆二十年，享和辛酉冬免侍直以來，葵肥橘黃之暇，專從事於毫楮之間，平昔起乎所注素靈二經長沙之書及其餘撰著，至是逐次完局可繕寫者，亡慮數十部，殆至等身緒餘，又取此書加編割，而猶未滿意，謂其不論方術之大體，而抉瑣末不及理療之切要，而搜迂僻，自以竹頭木屑，視之不欲示人，自余觀之，此書収録皆醫經所未載，方書所未具，本草所未採，前賢所未辨，世人所未察，每一事必挾其始末，究其同異，參以証左，大則可以裨治術，細亦足以博學識，無一不可悅目而快意，則謂之醫苑之珍珠船可也，顧其體例在醫家之書別自一調，惟與張季明俞子容之書畧相類，似宋陳無擇氏嘗以方技之書比四部，而四部之外有說之一部，張俞二氏之書是已，此亦以為說部之一，豈止若竹頭木屑，至覆庭裝載，始見其用也哉，與其所注素靈二經長沙之書及其餘諸編，均可以垂世而行遠無疑矣，及門諸子謀刻諸書，然卷秩浩瀚，非歲月之所能遽辨也，獨此書葉頁不甚多，故先付之梓云，文化己巳重陽後一日，六弟丹波元晁謹識」

上梓されておらず、稿本段階の『医賸』を参照したと考えられる。

現在では、刊本の『医賸』しか参照できないので、便宜上、刊本にある「廣東人參」の項目を引用する。『医賸』の起稿は、その跋文によると天明八年（1788）であり、前後二十年を経て、享和元年（1801）に多紀元簡が奥医師を免じられた後に、編集作業を行い、文化六年（1809）に上梓された。刊本『医賸』の「廣東人參」項の本文を見てみよう。（アルファベットの小文字で提示された部分は『葉圃擷餘』のテキストを照会するため、前掲『葉圃擷餘』の大文字で提示された部分に対応する。）

- b. 惠州府志 云、韓宗伯云、坡公羅浮五詠人參地黃甘菊薏苡枸杞、蒔千山房之小圃各為詩紀之、今羅浮所産惟枸杞薏苡恒有、甘菊亦時有之、人參地黃即老圃無能識者、當時崎嶇万里、從何移根、人參之詩曰、靈苗此孕育肩股或具體、又曰青極綴紫萼、圓實墜紅米、言之鑿鑿、應非浪語、然二物不書傳信也。
- c. 又屈翁山 廣東新語 云、廣東無人參。
- d. 而宋廣業 羅浮山志會編 則云、人參羅浮所産、殊与本草人參不類、状如仙茅、葉細圓有紫花、三葉一花者為仙茅、一葉一花者為人參、根如人字、色如珂玉、煮汁食之、味与人參無別、但微有膠漿耳、滋補亦如人參、山人採作藥餌、按羅浮在廣東惠州、此則別是一種人參。
- 而今船上廣東人參非廣東所産、以其初廣舶僦來遂有其名、乃與羅浮産者殊異。

『医賸』と『葉圃擷餘』と比較すると、『惠州府志』『廣東新語』『羅浮山志會編』が共通していることがわかる。つまり、前掲A『葉圃擷餘』の冒頭の「搜堂医賸云」がどの範囲までかかっているのかというと、『医賸』からの引用範囲が、『葉圃擷餘』のB. C. D.の部分に及んでいることがわかる。一見すると、『葉圃擷餘』はさまざまな書籍から曾槃が抄出したもので構成されているように見えるが、その一部は先行する書物に依拠、襲用していることがわかるのである。ただし、『(廣東)新語』の例でもわかるように、『医賸』には「廣東無人參」とだけあるのに対して、『葉圃擷餘』では増補されているように見える。この辺の実態については慎重に考察する必要があると思われる。というのも、今比較しているのは刊本の『医賸』であり、曾槃が見たものが内容的に刊本と同じものだったかどうかは不明だからである。

『葉圃擷餘』「西洋人參」の冒頭の「搜堂医賸云」に続く「廣東人參近来舶上多致之、未詳是何物」の部分（Aの波線部）は、廣東人參が舶来しているが未だに何物であるのか不明という内容だが、元来『医賸』にあった可能性もある。その場合は、刊本の段階で削除されたことになる。不明だった内容が判明したということかもしれない。一方で、曾槃の評語である可能性、傍注などが紛れ込んだ可能性もあり、判断が難しい。

つづく「B. 惠州府志云、……」の部分は『医賸』と同じ部分を引用している。

次に、「C. 屈大均新語亦云、……」では著しく増補されたことが明確である。如何に増補されたのかを考えるために、『廣東新語』の「人蔘」についての記載と比較してみよう。³⁰

30 廣東新語 十五 第122頁 (圖書館) - 中國哲學書電子化計劃 (ctext.org) 2021年8月29日に参照した結果に従う。
<https://ctext.org/library.pl?if=gb&file=24118&page=122#%E4%BA%BA%E5%8F%82>

粵無人葠，蘇長公嘗種於羅浮，有詩云，上党天下脊，遼東真井底，靈苗此孕育，肩股或具體，移根到羅浮，越水灌清泚，地殊風雨隔，臭味終祖祢，公又種地黃，枸杞，甘菊，香薷，為羅浮五葉之圃，予嘗欲倣之。

『葉圃擷餘』の「西洋人參」原文と対応するところは「粵無人葠」であり、「粵」は「廣東」の簡称であり、「人葠」は「人參」のことである。曾槃は「粵無人葠」を「廣東無人參」のような理解しやすい形に直すとともに、「是以近為本草之學者皆以為此非人參，即所謂三七耳」の部分が付加したことがわかる。すなわち，最近の本草學者たちの説（人參ではなく「三七」であるということ）を受け入れた結果であった。更に，「然攷諸書，三七產廣西，而未言產廣東，且云暴乾黃黑色，如老地黃，有節，今廣東人參如此乎，【按錦囊秘錄，解毒至寶丹中用人參三七，槃按清陳振先採葉錄云，廣三七又名旱三七，治諸般血症，注云，三七有數種，羊腸三七，竹節三七，謂之水三七，人參三七，蘿蔔三七，又云旱三七】」の文を加え，『錦囊秘錄』の中の「解毒至寶丹」の製法によれば，「人參三七」を使うべきことを記し，『陳振先採葉錄』を引用して，さまざまな三七の種類を説明している。

『葉圃擷餘』のDの部分と『医賸』dの部分は，ほぼ同様の記述が引用されているが，前者では「不知吳舶所載來亦此種與，紀以俟檢查」（波線部）注記が付加されている。これが誰の注記であるのかという問題は，冒頭部分の注記と同じく，曾槃か元簡か断定することは難しい。

この部分にかかわって，注目される資料がある。それは曾槃の『本草綱目纂疏』（以下は『纂疏』）卷三，草類「西洋參」の項目で，以下に引用する。下線部と波線部はそれぞれ対応する部分を比較するために，『葉圃擷餘』『医賸』の関連する部分を引用する。

疑蓄數年，一日偶於佐伯侯外書房，觀清宋廣業 羅浮山志會編【品物志中】，有人參一則，於是始知三樞五葉之外，廣東別有一種人參，抄還示家君，家君讀之大喜，遂請官，欲使估舶載來其生草，親驗其形狀，以確其名實矣，事在戊申初夏，於今猶未有命，云，茲錄會編之文，敢告諸同人曰，人參羅浮所產，殊與本草人參不類，狀如仙茅，葉細圓，有紫花，三葉一花者為仙茅，一葉一花者為人參，根如人字，色如珂玉，煮汁食之，味與人參無別，但微有膠漿耳，滋補亦如人參，山人採作藥餌。

D. 特清宋廣業 羅浮山志會編・品物志 云，人參羅浮所產，殊與本草人參不類，狀如仙茅，葉細圓有紫花，三葉一花者為仙茅，一葉一花者為人參，根如人字，色如珂玉，煮汁食之，味與人參無別，但微有膠漿耳，滋補亦如人參，山人採作藥餌，羅浮山在廣東惠州，乃此三樞五葉之外，廣東別是一種人參，不知吳舶所載來亦此種與，紀以俟檢查。

d. 而宋廣業 羅浮山志會編 則云，人參羅浮所產，殊與本草人參不類，狀如仙茅，葉細圓有紫花，三葉一花者為仙茅，一葉一花者為人參，根如人字，色如珂玉，煮汁食之，味與人參無別，但微有膠漿耳，滋補亦如人參，山人採作藥餌，按羅浮在廣東惠州，此則別是一種人參。

今村軻『人參史』第七卷³¹は曾槃『人參識』³²を引用する書物である。これによると、享保中の持渡物の中にすでに「廣東人參」という薬材があったが、舶来品としての廣東人參についてよく疑問を持っていて、本草を業とする医家たちは人參の真偽を判断に苦しんでいた。人參が日本への輸入されるのは享保期からであるが、品質の低下と真偽の弁別が困難であることから一時輸入が禁じられた。³³寛政期に至って、輸入が解禁されると「廣東人參」が新たに話題となったらしい。³⁴一時実物を見ることできなかつたため書物にある知識や伝聞を確認しながら試行錯誤が繰り返された。曾槃や多紀元簡らも「廣東人參」に対して関心を持続していたのである。

それで、『纂疏』の冒頭の「疑蓄数年」の裏には次のような事情があった。ある日、佐伯侯の屋敷で新しい情報（『羅浮山志會編・品物志』）を入手できたので、それを写し取って家に帰り「家君」に示したところ、「家君」はこれを読んで大いに喜び、「官」に願ってその実物を買って求め名実を直接確認しようとした。このことは「戊申」（天明八年）のことであったが、未だに命が下らないという。

さて、この「家君」は誰を指すのだろうか。いくつか選択肢がある。「家君」³⁵とは「一家の長。他人に対して自分の父という称」（『広辞苑』）であるが、『纂疏』は曾槃の編著であるから、「家君」は曾槃の父「曾昌啓」のことだと考えるのが自然であろう。

ところが、曾昌啓は安永五年（1776）四月に日光詣御之役の時に急死しており、天明八年にはこの世に存在しない。ちなみに曾槃の師であり、田村西湖の父、田村藍水も安永五年に没している。となると、曾槃の師であり、多紀元簡の父の多紀藍溪（1732-1801）であった可能性が高くなる。「官」は幕府のことであろうから、幕府に願い出ることができる地位にあるのは、奥医師の多紀藍溪がふさわしい。曾槃は元恵を「家君」と呼べる立場にはないが、ここが『医賸』という書物からの引用であると考えすることで、この矛盾は解決されるであろう。この部分は原『医賸』ともいべき本文を引用したものだと言えるのではなかろうか。

ここで問題にしたいのは、曾槃が多紀家を通じていかに多くの、そして新しい情報を入手していたかということである。それでもまだ謎の部分が多くあったのであろう、『薬圃擷餘』では「紀以俟検査」と記しており、書物で伝えられた情報に対して半信半疑で慎重な態度で接していたことが窺える。

以上、『医賸』をめぐる問題を述べてきたが、『薬圃擷餘』に戻ると、Eの部分では、寛政五年（1793）に薩摩に下り、呉継志から聞いた人參に関する情報が記載されている。周知のように、呉継志は薩摩藩の編纂になる『質問本草』に関わる人物で架空の人物とされる。もう一つ

31 今村軻著『人參史』第七卷 蓼名彙攷篇 思文閣 昭和四十六年 PP.172-181

32 異名粵人參、（華商俗称）、廣東人參（全上）、洋參、（全上）、洋産、（全上）、（或者之ヲ琉球人參ト称ス非也）。往歳長崎之陳某ナルモノ言フ、享保中夏商多此參ヲ将来ス、其始是ヲ粵人參ト云參商竟ニ悞テ、奥人參ニ作、（今市中所謂廣東編、一尔奥編と云亦悞）是ニ於イテ舶商改テ廣東人參トナス、（粵者即廣東也）、其大ナル者一斤凡五六十根、其ウチ或者劈テ、晒乾スルモノアリ、前医遵ヒ用テ験アリトス、故ニ羊角白棍京參等者廢シテ、複用ユルモノナシ、時ニ宝曆癸未之年、故有テ嚴禁セラル、其後天明戊申之歳、亦其禁ヲ停ラル、今世医廣ク此を用フ。

33 宗田一著『渡来薬の文化誌：オランダ船が運んだ洋学』八坂書房 一九九三年 PP.172-181

34 洋学史研究会編『大概玄沢の研究』思文閣出版 一九九一年 PP.159-190

35 『広辞苑』第五版 岩波書店 一九九八 PP.479

重要なのは、Fの『本草従新』で、本書は前述のように部類の配列その他について、曾槃に影響を与えた可能性がある。

以上のように、多紀家からの情報を貪欲に取り込み、名と実を一致させるために日夜新しい情報を仕入れようとする曾槃の姿が本文から窺えるのである。

2. 冬虫夏草

次に草類の「冬虫夏草」の例を見てみよう。

a.清徐崑 柳崖外編 云、滇南有冬虫夏草一物也、冬則為蟲、夏則為草、形似蠶、色而微黃、草形似非較細、入夏蟲以頭入地、尾自成草、雜錯于漫草溥露間、不知其為蟲也、交冬草漸萎黃、乃出地蠕蠕而動、其尾猶軟軟然、帶草而行、蓋隨氣化轉異移理有然者、和鴨肉頓食之大補、b.椿園 西域聞見錄 云、入藥極熱、c.袁棟 書隱叢說 云浸酒服之、可以却病延年、d.清吳澹水 本草従新 云、甘平保肺、益腎止血、化痰已勞嗽、e.或云 遵生八牋 所載鹿跑草正此物也、未詳當否、f. 今年丁巳秋九月、我師 御医法印多紀藍溪先生書以上諸説、併列医学館薬品會、乃紀載于此。

——国会本『薬圃撷餘』草類「冬虫夏草」

「西洋人参」と同様、中国（清）の書籍からの引用が中心となっていることが明瞭である。書名は で囲い、その編著者には下線を付し、内容的なまとまりの頭に記号 a～f を入れた。『柳崖外編』『西域聞見録』『書隱叢説』『本草従新』の本文が順に引用され、対象物の形態的特徴や薬効、処方などが紹介されている。e はある説でいわれている『遵生八牋』なる書物に見える「鹿跑草」がこれに該当するという説を挙げているが、「未詳當否」すなわち相当するかどうかは未詳と評している。以上の a～e は、f の波線部を見ると、その記録者が判明する。「丁巳」とは寛政九年のことで、その九月に曾槃の師である多紀藍溪が上記の諸説を記録し、藍溪が主宰する医学館で行われた薬品会で、実物とともに展示したものであり、これを曾槃が『薬圃撷餘』に記載したのである。後述するように、「冬虫夏草」は寛政年間に中国船によって日本にもたらされ、医者・本草家の間で話題になっていたのである。曾槃が上記の薬品会に参加していたかどうかは不明ながら、薬品会の情報を得ることができる位置にあることは注目してよい。また、「今年丁巳」とあることから、この項目を執筆していたのが同年であることがわかり、『薬圃撷餘』の成立時期を示す重要な情報となる。曾槃は多紀藍溪³⁶及びその長男多紀元簡³⁷との交流を示す例も多く存在している。

次に、「西洋人参」の項で見た『医賸』³⁸との関係を考えてみたい。以下は同書の「冬虫夏草考」

36 森潤三郎『多紀氏の事蹟』PP.14-48 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1208864> 「多紀氏本家の履歴」25-37/205

37 同上

38 多紀元簡『医賸』3巻附1巻。[3] <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2555675?tocOpened=1> 49-51/56

京都大学富士川文庫『経穴纂要』<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00002154#?c=0&m=0&s=0&cv=0&r=0&xvwh=-8451%2C-209%2C22517%2C4160>

此書ハ先生ノ隨筆ニシテ神農嘗薬医学醫科ナドヨリシテ何ト云コトナク某品ナドニ至リ附録ニハ募原屠蘇ナドノ詳攷ヲアゲ医書古来ヨリノ疑義ヲ辨明シ人ノコレマデ知及サヌコトヲ見イダシー一攷證ヲナシ医学ノ助トナラズ是先生久年ノ積ムトコロニシテ一時ニナルモノニアラズ又何レモ医者知ラズンバアルベカラザル

の項の全文である。書名を□で囲み、その作者には下線を付した。また、引用者の判断で改行を行い、下線を付した。

寛政中、吳舶儀来冬虫夏草、有人問其功用者、因彙諸書所記以示焉。

吳遵程『本草從新』曰、冬蟲夏草、甘平、保肺、益腎、止血、化痰、已勞嗽、四川嘉定府所産者最佳、雲南貴州所出者次之、冬在土中、身活如老蠶、有毛能動、至夏則毛出土上、連身俱化為草、若不取、冬則復化為蟲。

袁慢恬『書隱叢説』曰、昔有友人、自遠來餉予一物、名曰夏草冬蟲、出陝西邊地、在夏則為草、在冬則為蟲、故以是名焉、浸酒服之、可以却病延年、余所見時僅草根之枯者、然後截、形体、顔色各別、半青者僅作草形、半黑者畧粗大、具有蠕蠕欲動之意、不見傳記書之、以俟後考矣。

徐崑『柳崖外編』曰、滇南有冬虫夏草一物也、冬則為蟲、夏則為草、形似蠶、色而微黄、草形似韭較細、入夏蟲以頭入地、尾自成草、雜錯于漫草溥露間、不知其為蟲也、交冬草漸萎黄、乃出地蠕蠕而動、其尾猶蕪蕪然、帶草而行、蓋随気化轉異移理有然者、和鴨肉頓食之大補。

七十一『西域聞見録』曰、夏草冬蟲、出雪山中、夏則葉岐出類韭、根如朽木、凌冬葉乾則根蠕動、化為蟲入葉極熟。

魯華祝『衛蔵圖識』曰、冬蟲夏草出撥浪上山、本草不載性温煖補精益髓。

唐秉鈞『文房肆考』曰、青藜餘照、載太史董育萬宏偶談四川産夏草冬蟲根如蠶形、有毛能動、夏月其頂生苗、長數寸、至冬苗稿、但存其根、嚴寒積雪中、徃徃行於地上、京師藥舖近亦有之、彼尚康熙時也、近年蘇郡漸有、但古來本草及草木諸典故、從未及之、未詳性味、近吳遵程有此品、言保肺益腎、不道從何攷據、余仍疑之、未敢輕嘗以意察之、其不畏寒而行雪中、則其氣陽性温可知、應奎書院山長、孔老師諱繼元號裕堂、係先聖裔、桐鄉烏鎮人、誠正君子人也、述伊弟患怯汗大泄、雖盛暑處密室帳中、猶畏風甚、病三年、医藥不效、症在不起、適感自川解組歸、遺以夏草冬蟲三斤、遂日和葷蔬作肴燂食、漸至全愈、因信此物之保肺氣實腠理、確有徵驗、嗣後用之俱奏效、因信此品功用、不下人參。

——国会本『医賸』附録「冬虫夏草考」

寛政年間、冬虫夏草が中国船（吳舶）で日本に運ばれてきた。人にその効用について質問され、様々な書物に記されたものを集録したとする（波線部）。以下、吳儀洛『本草從新』、袁棟『書隱叢説』、徐崑『柳崖外編』、七十一『西域聞見録』、魯華祝『衛蔵圖識』、唐秉鈞『文房肆考』と続いている。曾槃の『薬圃擷餘』と多紀藍溪の筆記した内容とは、順序が異なるけれども、四つの共通する引用書が含まれている。魯華祝『衛蔵圖識』と唐秉鈞『文房肆考』は多紀元簡が新たに追加したもののだろう。一方、同じ引用書でも引用の量に違いが見られる。

以上見てきたように、『薬圃擷餘』には、多紀氏の影響を受けた記述と多紀氏との交流の痕跡が多く見られる。下の表は『薬圃擷餘』と『医賸』に共通する項目、あるいは関連のある項目を抜き出したものである。

コトニシテ無益ノコトナシ世ノ好テ著述ヲナシ博ヲ貪テ雜駁ニナルモノト同日ニシテ論ズベカラズ誠ニ古今未曾有ノ書ニシテ特リ医学ノミナラズ凡学者此書ヲミバ益ヲ得ルコト少カラザルナリ

——『経穴纂要』に附する既刊情報

表三：『薬圃擷餘』と『医賸』の関連項目対照表

薬圃擷餘	巻号	医賸	巻号
牧靡	草類	牧靡	巻の下
冬蟲夏草	草類	冬蟲夏草考	巻の下 附録
西洋人參	草類	廣東人參	巻の下
杭有二種	木類	杭有二種	巻の下
杜松	木類	底野迦	巻の下
吸毒石	水土金石類	吸毒石考	巻の下 附録
丹葉	水土金石類	丹葉	巻の中

3. 杜松

木類「杜松」の項によって、曾繁自らの見聞と西洋の書物からの引用の例を紹介する。中国の本草学や西洋の薬物学と博物学の知識について、先駆的な受容紹介の役割を果たした人物の一人が曾繁である。ここでは、いかに曾繁が本草学に関する該博な学識を持ちながら、西洋薬物への強い関心を示した事例について見ていく。以下に「杜松」の項の全文を引用するが、便宜上段落を区切り（A～D）、句読点や記号、下線を施し、書名や出典は□で囲み、割注は【】で括って示した。なお、割注に振られたカタカナの読み仮名は省略した。³⁹

A. 天明戊申之夏、吾師太医令永寿院劉君恭、蒙底野迦製造之事、其法中所用杜松近郊絶鮮、乃命繁使取諸房総瀨海、即得数劬上之、向質諸説審其體用、頃偶得其筭于巾衍中、漫記于左。

B. 興化府志云杜松、宋志松葉柏身、前志謂杜松葉似杉、与松弗類、爾雅謂松葉柏身為樅、南產志云（木屠）、亦曰杜松、葉如側柏、泉州府志云杜松其葉如杉而小、尖勁如刺、木如松而文細、其色赤亦有為柱者。

C. 按是泉州府志記正二種、其為柱者、隨地有之、枝葉与刺柏大氏一樣、但葉心向下、其子似柏実而稍大、香氣薄劣、俗呼曰没魯、出羽【米沢】山中有合抱者云其一、盖偃蹇于瀨海之地者也、俗謂之鼠杉、又曰襪屨、曰磯馴杉、状如臥柏、蜿々夭々、盤屈于沿海石罅及砂磧之處、其葉如喬聳之杜松、其子宛然似續隨子、自夏至秋全熟、即蒸之取其露【法詳記本編底野迦款下】以充葉用。

D. 繁閱医籍未知有杜松主療、因叩之亡友宇田川玄隨、乃以国字詳訳西書示之、其言曰杜松性温、而且是属第三級【西洋品定藥性之緩急、以級而分之、寒熱温涼各有階級】其子温属第三級、而其燥属第二級、発汗解諸毒、開諸閉塞稠粘、諸液凝滯、解積稀痰、驅出小水【右瓦烈尼斯之説】治久咳刷治滌除胸膈之粘痰惡液、杜松子四錢、以大麦水煮、取六十四錢和勻冰糖、甘苦得所、服之三四次、治氣氣腰痛及腹痛子宮損傷、聖京健【此病都而言之始於頭痛、其毒次第漸長起于高下于厚也、而其疼痛与漏泄之液於此二件求是大凡不失其微、詳出内科選要第五篇三十七章】精新杜松子、極研細、水煮熟、

39 国会本「杜松」の項の割注にあるカタカタ読み仮名である。瓦烈尼斯（カレニス）聖京健（シンキンケン）刺歇林牛斯（ラヘリンキウス）褥私格利垓斯（チョスコリテス）

絞取汁、再煎熬、如蜜為度、朝々一匙服之、又用其油五六滴、亦得又防禦流行天疫及諸般可傳染不淨惡氣制服之、又杜松子投炭火中以熏室中、【右刺歇林牛斯之説】治疥癬惡瘡、杜松樹皮燒灰以水和勻傳貼之【右褥私格利埤斯之説】。

この記事の説明する前に「底野迦方」⁴⁰の処方分類と文献上の先行研究を述べていく。まず、「底野迦方」の処方に使われる薬材「杜松」とその実「杜松子」⁴¹について簡単に紹介する。宗田一氏『渡来薬の文化誌：オランダ船が運んだ洋薬』⁴²の資料紹介と解説の部分では、宇田川玄随著『遠西名物考』の中にある取載薬物を概説する。その引用内容によれば、「底野迦」についてこう説明する。底野迦というものは元々中国人による音訳であり、また「的里阿加」とも書く。テリヤーカと書く場合もある。西洋からの一種の奇薬である。百病が治ると言われ、一般的に解毒剤として知られる。江戸後期において、臨床では、単方底野迦も複方底野迦も多く利用された。

では『薬圃擷餘』の本文を具体的に眺めてみよう。Aの波線部は曾槿の経験したことであり、天明八年（1788）戊申の歳の夏、曾槿の師である永寿院多紀藍溪が幕府から底野迦（テリアカ）製造を命じられたが、その原料となる杜松が江戸近郊に少ないため、曾槿に杜松を房総瀬海の浜地に取り行かせた。曾槿が数斤の杜松を採って献上した。さきに杜松の形態や用途について質問したが、この頃、箱に保存されていたその回答を記す紙を見出して、関連書物に出る杜松の記載について漫録したという。本文の最初に自らの体験を述べ、その次に、文献に描かれた杜松の来由について述べている。

Bでは、中国の地方史一『興化府志』『南産志』『泉州府志』一が引用され、杜松の産地、及びその様子や名称が記された。Cは「按語」の部分である。曾槿が今までの文献にみられる内容によって、その異種の形態・俗名・生長環境などについて師から受け継いだ内容を記した。その末尾に、日本の国産地と杜松子（その実）を使って蒸して薬用の露を取る方法が短く紹介してある。注記の部分に「法詳記 本編 底野迦欵下」という記述があり、「本編」にその詳細な製法を記したことを示した。この「本編」とは何を指すのだろうか。のち刊行された『本草綱目纂疏』のことを指すのか、あるいは前述の『春の七くさ』の奥付にある刊行予告にあった『榛堂本草会識』をいうのか。さらに『榛堂本草会識』と『本草綱目纂疏』とはいかなる関係にあるのか。こうした問題については今後の課題としておくが、『薬圃擷餘』が「本編」を有しているということは、本書の編集目的が「本編」を補完する役割を担っていた可能性を示唆している点は注目されてよい。

Dでは、杜松について、曾槿が医籍を涉猟しながらもまだその主な治療法と対応病症などに通じなかったため、友人宇田川玄随（1756-1797）に尋ね、玄随から国語訳された西洋書の中に記された答えを得たことが記される。その国語詳訳西書の中に一つが、本文に見える『内科撰要』である。『内科撰要』は日本で刊行された最初の西洋内科翻訳書である。⁴³江戸詰の津山

40 前嶋信次著『東西物産の交流：東西文化交流の諸相』誠文堂新光社 一九八二年 PP.41-154

41 同上 PP.124-144

42 宗田一著『渡来薬の文化誌：オランダ船が運んだ洋薬』八坂書房 一九九三年 PP.279-283

43 実学資料研究会編『実学史研究 V』思文閣出版 一九八八年十二月 P.3

藩医であった宇田川玄随（槐園）がオランダ人ゴルテル J.de Gorter の内科書を訳して寛政五年（1793）から江戸で刊行を開始し、十数年を経た文化七年（1810）に全18巻が完結した。⁴⁴本書によって、それまで外科系志向であった日本の西洋医学は、内科系を加えて発展するようになり、西洋内科医を標榜する者も出るようになった。⁴⁵

玄随は宝暦五年（1755）に生まれ、寛政九年（1797）十二月に亡くなった。此の文の中に「亡友宇田川玄随」という記述から寛政中期に玄随への質問が行われ、『薬圃撝餘』のこの項が作成されたのは寛政九年十二月以降ということになる。

玄随の教示を仰ぐことによって、曾槩は遂に薬性や対応病状の処方について明らかにし得た。中国の本草の典籍の中の記載だけでなく、西洋の医学の知識も蓄積の一部として身につけていったのである。曾槩が西洋薬物への強い関心を示した一例と言えるのだろう。

さらに、のち数多く編纂の作業をしながら、出版や刊行のため、個人の趣味的な聞見録ではなく、公開的な知識の場を創りながら、その編纂趣旨も常に蘭学や洋学を重要視してきたと言える。曾槩の関心は、蘭学の知識が急速的に増加するこの寛政期から、徐々に本草学から洋学や博物学へ拡大する動きが見えると言えよう。

おわりに

以上、『薬圃撝餘』の成立過程について考察してきたが、書誌学的な比較検討を通じて、①国会本、②内閣本、③岩瀬本、④杏雨本、⑤東医本の成立に関する前後関係を明らかにした。

刊行を予定していた『薬圃撝餘』だが、稿本の最初期では「草類」から始め、のち「草類→木類→水土金石類」と「草類→木類→水土金石類→禽獸蟲魚類」の段階を経て、項目数を増加させつつ、「水土金石類→草類→木類→禽獸蟲魚類」のような状態で定着を見た。この過程の中で、特に部類の配列の変化に関しては、曾槩自身の関与あるいは門人の手が加わった可能性もあり、また『本草会識』（あるいは『本草綱目纂疏』）など大部の編纂物の補助的な編纂物であったことが想定される。

一方、『薬圃撝餘』には多年の曾槩自身の体験や見聞が記録として残されている。数多く本草書や地誌が引用されるが、注目したいのは『医賸』の存在である。曾槩の師である多紀藍溪及び『医賸』の著者である多紀元簡と関わる記事が本書には散見され、曾槩の活動の具体的な様相、即ち、薩摩藩の侍医として公的な任務—藩領にある薬圃の管理や薬草の鑑定—に加えて、幕府の医員や他藩の江戸詰の医者たちとの交流によって得られた情報が記されている。

また、曾槩の情報の収集態度は、伝統的な本草知識に束縛されることなく、中国からの新規の舶来書籍（『本草従新』『西域聞見録』など）の知識を筆録するとともに、西洋の植物学や薬学への関心を持ち、蕃書が読める蘭学者たちから新しい情報を得ていることが注目される。

最後に、曾槩が『薬圃撝餘』で行った、彼の日々の活動を通じて得た知識を入れ込みながら、新たな見聞や情報を増補する作業は、当時の本草学者に普遍的なものであると考えられる。多紀元簡『医賸』も曾槩が参照した段階から刪補を経て刊本の形になったと考えられるし、『薬圃撝餘』の中には後継の本草学者たちが残した増補の跡が随所に見られる。学者たちの日々活

44 同上 PP.3-8

45 同上 PP.5-13

動の結果が、写本の変化として表れているのである。

本稿は五つの写本の形式的な系統については明らかにできたものの、『薬圃撮餘』が曾槩の他の本草書とどのような関係にあったのか、また後世の本草学者（安田静、藤益時行、高木春山）にどのように利用され、どのように評価されたのかについてなど、課題を多く残している。今後の研究では、『薬圃撮餘』の中に出る人名や見聞について詳細に解明することを通して、曾槩の交友範囲の拡がりを視野に入れながら、曾槩の本草学の全体像に迫ることをめざしたいと思う。

付記及び謝辞

本研究は、武田科学振興財団の2019年度「杏雨書屋研究助成」に採用された研究課題「薩摩藩の編纂事業における曾槩及びその著書についての研究」の成果である。研究助成をいただいた武田科学振興財団杏雨書屋ならびに博士後期課程での研究生活を支援して頂いた公益財団法人米盛誠心育成会、種村完司先生に厚く感謝申し上げたい。また、本研究を遂行するに当たり、指導を賜った丹羽謙治、高津孝両教授をはじめ、資料収集に際してご協力を頂いた方々、諸機関にこの場を借りて御礼申し上げる。

参考文献

- 浅田宗伯『皇国名医伝』 出雲寺文次郎〔ほか6名〕 嘉永四年
 有坂隆道編『日本洋学史の研究Ⅰ』 創元社 昭和五十二年
 磯野直秀著『日本博物誌年表』 平凡社 二〇〇二年六月
 伊藤恭子編『江戸のくすりハンター 小野蘭山：採薬を重視した本草学者がめざしたもの』 内藤記念くすり博物館 二〇一二年
 今村鞆著『人蔘史』 第四卷 人蔘栽培篇 思文閣 昭和四十六年
 今村鞆著『人蔘史』 第七卷 蔘名彙攷篇 思文閣 昭和四十六年
 上野益三著『薩摩博物学史』 島津出版会 昭和五十七年六月発行
 上野益三著『日本博物学史』 講談社学術文庫 一九八九年
 上野益三著『年表 日本博物学史』 八坂書房 一九八九年
 上野益三著『博物学者列伝』 八坂書房 一九九一年
 遠藤正治『本草学と洋学：小野蘭山学統の研究』 思文閣出版 二〇〇三年
 岡西為人著『本草概説』 オンデマンド版 創元社 二〇一八年
 『科学朝日』 編『殿様生物学の系譜』 朝日新聞社 一九九一年
 鹿児島市編『薩藩の文化』 鹿児島市教育会 昭和十年
 笠谷和比古著『徳川吉宗』 筑摩書房 一九九五年行
 金子務著『江戸人物科学史：「もう一つの文明開化」を訪ねて』 中央公論新社 二〇〇五年
 古賀十二郎著『長崎洋学史』（上巻） 長崎文献社 昭和四十二年
 古賀十二郎著『長崎洋学史』（下巻） 長崎文献社 昭和四十二年
 木原均〔ほか〕著『黎明期日本の生物史』 養賢堂 一九七二年
 木村陽二郎著『江戸期のナチュラルリスト』 朝日新聞社 一九八八年

- 小石家文書研究会編『究理堂所蔵京都小石家来簡集』思文閣出版 二〇一七年
- 白井光太郎著, 木村陽二郎編『白井光太郎著作集 第6巻 本草百家伝・その他』科学書院, 霞ヶ関出版 一九九〇年
- 白井光太郎著『曾占春傳』呉教授莅職二十五年記念文集別刷 昭和四年
- 杉本つとむ著『江戸の博物学者たち』講談社学術文庫 二〇〇六年
- 杉本つとむ著『江戸洋学事情』八坂書房 一九九〇年
- 杉本勳編『近代西洋文明との出会い：黎明期の西南雄藩』思文閣出版 一九八九年
- 鈴木彰, 林匡編『アジア遊学190 島津重豪と薩摩の学問・文化：近世後期大名の視野と実践』勉誠出版 二〇一五年
- 宗田一著『渡来薬の文化誌：オランダ船が運んだ洋薬』八坂書房 一九九三年
- 反町茂雄編『紙魚の昔がたり 明治大正篇』八木書店 一九八七年
- 史料纂集古記録編 第79回配本『田村藍水・西湖公用日記』続群書類従完成会 昭和六十一年
- 高津孝著『江戸の博物学：島津重豪と南西諸島の本草学』平凡社 二〇一七年
- 竹内理三編『日本史小辞典』第七版 角川書店 昭和六十年
- 田中優子著『江戸はネットワーク』平凡社 二〇〇八年
- 陳捷編『医学・科学・博物：東アジア古典籍の世界』勉誠出版 二〇二〇年
- 東洋文庫編『岩崎文庫和漢書目録』東洋文庫 一九三四年
- 福井保著『日本書誌学大系12 内閣文庫書誌の研究：江戸幕府紅葉山文庫本の考証』青裳堂書店 一九八〇年
- 富士川游〔ほか〕編修『杏林叢書』第2輯 吐鳳堂書店 大正十二年
- 福井保著『日本書誌学大系106 内閣文庫本考証』青裳堂書店 二〇一六年
- 福岡ユネスコ編『九州文化論集2 外来文化と九州』平凡社 一九七三年
- 藤田豊『日本科学技術史』明玄書房 昭和三十一年
- 平野恵著『十九世紀日本の園芸文化：江戸と東京, 植木屋の周辺』思文閣出版 オンデマンド版 二〇一七年
- 平野恵著『園芸の達人本草学者・岩崎灌園』平凡社 二〇一七年
- 細川博昭著『江戸の鳥類図譜：大名, 学者, 本草画家が描いた日本の鳥たち』秀和システム 二〇二〇年
- 細川博昭著『江戸の植物図譜：花から知る江戸時代人の四季』秀和システム 二〇二一年
- 前嶋信次著『東西物産の交流：東西文化交流の諸相』誠文堂新光社 一九八二年九月
- 前嶋信次著『文化の東西交流：東西文化交流の諸相』誠文堂新光社 一九八二年九月
- 宮本三郎著, 武田科学振興財団杏雨書屋編集『本草・薬物の研究』武田科学技術振興財団杏雨書屋 二〇一六年
- 村上直〔ほか〕編『日本近世史研究事典』東京堂出版 一九八九年
- 森潤三郎著『多紀氏の事蹟』日本醫史學會 一九三三年
- 内藤喬『曾占春先生と「成形図説」』鹿児島高等農林学校校友会報「土」第十二号別刷 昭和十三年
- 中村質著『近世対外交渉史』吉川弘文館 二〇〇〇年

- 日本学士院日本科学史刊行会編『明治前日本医学史』（第一巻）日本学術振興会 一九五五年
丹羽謙治編，高津孝〔ほか〕執筆 『「平成」新収未公開貴重書展：令和元年度鹿児島大学附属
図書館貴重書公開』鹿児島大学附属図書館 二〇一九年
矢部一郎著『江戸の本草』サイエンス社 一九八四年
山田慶児編『東アジアの本草と博物の世界 上 下』思文閣出版 一九九五年
山田慶児編『物のイメージ：本草と博物学への招待』朝日新聞社 一九九四年
洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』思文閣出版 一九九一年
吉田忠・李廷挙編『日中文化交流史業書 第8巻 科学技術』大修館書店 一九九八年
渡辺芳郎編『奄美群島の歴史・文化・社会的多様性』南方新社 二〇二〇年